

『史記』子貢遊説説話の成立について

嘉 瀬 達 男

一 序 言

孔門の弟子子貢^①は孔門十哲の一人である。言語に秀でるとされ、外交家、貨殖家としても多く論じられてきた。その名は『論語』『左傳』の外に、『禮記』『大戴禮』『韓詩外傳』や、『孟子』『墨子』『莊子』『荀子』『韓非子』、更には『史記』『漢書』など先秦兩漢の書物の多くに見える。しかしながら従來の子貢研究では、『論語』『左傳』以外の記事について、殆ど言及されていない^②。それは『論語』『左傳』以外の記事が、子貢を論じる資料としての信憑性に缺けていることに起因するらしい^③。だが今後、子貢の傳記・思想研究を更に進めるためには、『論語』『左傳』以外の書物に見える子貢記事も検討の対象とすべきであろう。もちろん慎重に考證を重ね、十分に吟味する必要がある。慎重な吟味を行ない、それぞれの資料がもつ意味を明らかにしていくことが、子貢の傳記・思想の研究を新たな段階へ進めることになると思われる。

小論では『論語』『左傳』以外に種々ある記事の中でも、『史記』仲尼弟子列傳に見える子貢が諸國に遊説する記事を取り上げ検討を加えたい。この記事は、子貢が齊の侵略から魯を救うために齊・吳・越・晉の四箇國に遊説し、齊と吳、吳と晉、吳と越を次々に戦わせることによって、小國魯を守るという内容である。

この子貢遊説の記事は史實との矛盾が多く、『史記』の評釋者からは戰國遊説家の妄説、後人の攙入と非難されてきた。^④例えば梁玉繩『史記志疑』は十二もの疑義を提示し「即ち其の言ふ所は、了に一實無し」と結言し、「妄談」とまで言う。^⑤しかし史實として認められない記事であるから「妄談」と斷言する見方は、一面的であるし速斷に過ぎる。それに對して高橋均「仲尼弟子列傳について」(『東京教育大學文學部紀要・國文學漢文學論叢』第一五輯、一九七〇)は『史記』子貢遊説記事に關し、「やや大膽な想定をすれば、周公の後ではあるが弱小國であつた魯國を守る英雄を孔子の弟子の中から見つけようとし、一方で韓非子や説苑にみられるような遊説家的側面をもつた人物をさがし出してきて合成すると、史記の傳に近いものが出来るのではなからうか」と説かれる。高橋氏の「想定」は子貢の「遊説家的側面」に着目した卓論である。しかし『史記』仲尼弟子列傳全體を論じることが目的とした論文であるためか、殘念ながら子貢遊説記事に對する検討が十分には盡くされなかつた。そこで小論は高橋氏の「想定」に導かれつつも、この遊説記事に對して今少し詳細な検討を試みたいと思う。そして『史記』子貢遊説記事が史實と矛盾することを妄談と批判し、攙入と切り捨てるのではなく、史實と矛盾するような記事が如何にして作り上げられたのか、また作り上げられた記事は如何なる意味をもつのかを改めて考えてみたい。

二 『史記』子貢遊説記事の検討

まず『史記』子貢遊説記事とはどのような文章であるのかを見てみよう。この記事は先述した通り、子貢が魯の危機を救うために齊・吳・越・晉の四箇國に遊説し、魯を守るといふものである。子貢の魯を守るための行動は、全て哀公期のこととして記述されているので、『春秋』及び『左傳』で確認できる事件も多い。そこで『史記』子貢遊説記事に見える事件を『春秋』や『左傳』等と對比し検討を試みたい。そうすることによつて『史記』子貢遊説記事のどの部分が他書に確認でき、どの部分が他書では確認できないのが明らかになるであらう。そして他書に確認でき

ない作爲された部分を検討することによつて、この記事が如何にして作り上げられたのかを考えて行きたい。

以下に『史記』子貢遊説記事の書き下し文を八段に分けて示し、子貢遊説記事の内容を確認できる「春秋」や「左傳」などの資料と對比し検討する。

まずは記事の發端となる第一段と、子貢が齊へと赴く第二段を見てみたい。

1 〔發端〕

田常亂を齊に作さんと欲するも、高・國・鮑・晏を憚る。故に其の兵を移し以て魯を伐たんと欲す。孔子之れを聞き、門弟子に謂ひて曰く「夫れ魯は、墳墓の處る所、父母の國なり。國の危ふきこと此の如きに、二三子何爲れぞ出づること莫きか」と。子路出づることを請ふも、孔子之れを止む。子張・子石行くことを請ふも、孔子許さず。子貢行くことを請ふに、孔子之れを許す。

2 〔子貢、齊の田常に説く〕

遂に行き、齊に至り、田常に説きて曰く「君の魯を伐たんとするは過てり。夫れ魯は伐ち難きの國なり。其の城は薄くして以て卑く、其の池は狭くして以て淺く、其の君は愚にして不仁、大臣は僞にして無用、其の士民も又た甲兵の事を惡む。此れ與には戰ふべからず。君、吳を伐つに如かず。夫れ吳は、城高くして以て厚く、池は廣くして以て深く、甲は堅くして以て新しく、士は選ばれて以て飽き、重器精兵、盡く其の中に在り。又た明大夫をして之れを守らしむ。此れ伐ち易きなり」と。田常忿然と色を作して曰く「子の難しとする所は、人の易しとする所、子の易しとする所は、人の難しとする所なり。而るに以て常に教ふるは何ぞや」と。子貢曰く「臣之れを聞く。憂ひの内在る者は彊きを攻め、憂ひの外に在る者は弱きを攻む、と。今君の憂ひは内に在り。吾聞く、君の三たび封ぜられて三たび成らざるは、大臣聽かざる者有ればなり、と。今君魯を破りて以て齊を廣むるは、戰ひ勝ちて以て主を驕らせ、國を破りて以て臣を尊くして、君の功焉れに與からず。則ち交はり日に主に疏から

ん。是れ君、上は主の心を驕らせ、下は羣臣を恣にし、以て大事を成すを求むるは難し。夫れ上驕れば則ち恣にし、臣驕れば則ち争ふ。是れ君、上は主と卻有り、下は大臣と交々争ふなり。此の如くんば、則ち君の齊に立つこと危ふからん。故に曰く、呉を伐つに如かず、と。呉を伐ちて勝たずんば、民人外に死し、大臣内に空しからん。是れ君、上に彊臣の敵無く、下に民人の過無く、主を孤にし齊を制する者は唯だ君のみなり」と。田常曰く「善し。然りと雖も、吾が兵、業に已に魯に加へたり。去りて呉に之かば、大臣我を疑はん。奈何せん」と。子貢曰く「君兵を按じ伐つ無かれ。臣請ふ、往きて吳王に使ひし、之れをして魯を救ひて齊を伐たしめん。君因りて兵を以て之れを迎へよ」と。田常之れを許し、子貢をして南のかた吳王に見えしむ。

子貢遊説記事は齊の大夫田常（陳恆・田成子）が齊で叛亂を起こそうとしたことから始まる。しかし田常は當時齊で權勢のあつた高氏・國氏・鮑氏・晏氏を憚り、齊で叛亂を起こすのをやめ魯に兵を向けようとする。それを耳にした孔子は、墳墓がある父母の國を守るために弟子の決起を促す。子路・子張・子石が名乗りをあげるが、孔子は許さず、子貢にのみ齊へ赴くことを許諾する。

孔子の許可を得た子貢は第二段で齊に赴き、田常に「魯を伐つても功にならないが、呉を伐てば田常が齊の實權を握ることが可能である」と巧みに吳討伐を勧める。田常は贊意を示すが「兵は既に魯に向いている」と討伐の無理を訴える。それに對して子貢は「田常が兵を押し止めていてくれれば、呉が齊を攻撃するよう仕向けましょう（呉が齊を攻撃してくれば、齊の兵が魯に向いても呉を討伐する理由ができる）」と言ひ、田常の許しを得て吳に向かう。

初めに子貢は「亂を齊に作さんと欲した」大夫田常に説いたと子貢遊説記事にある。このような子貢と田常との對面は、『左傳』哀公十五年の次の條にのみ見える。

哀公十五（前四八〇）年：冬、齊と平らぐ。子服景伯、齊に如き、子贛、介爲り……陳成子、客に館して曰く、寡君、恆をして告げしめて曰く、寡君、願はくは君に事ふること衛君に事ふるが如くせん、と。景伯、子贛を揖

して之れを進ましめ、對へしめて曰く、寡君の願ひなり。昔、晉人、衛を伐つに、齊、衛の爲の故に、晉の冠氏を伐ち、車五百を喪ひ、因りて衛に地を與ふること、濟より以西、禚・媚・杏より以南、書社五百たり。吳人敵邑に加ふるに亂を以てし、齊、其の病に因り、讜と闡とを取る。寡君、是を以て寒心せり。若し衛君の君に事ふるに視^{なまじ}ふるを得ば、則ち固より願ふ所なり、と。成子之れを病へ、乃ち成を歸す。公孫宿其の兵甲と贏に入る。これは、子貢が子服景伯の副使として齊に出掛け、子服景伯と子貢が旅舎で陳成子(田常)に會つたという記事である。魯は齊と講和した後、離叛した成を齊から取り戻すために子服景伯と子貢を齊へ派遣したのである。この『左傳』の記事では子貢が田常(陳成子)に巧みに説いた結果、成を取り戻している。他に田常との繋がりを示す資料も子貢が齊に行った記録も『左傳』にはないが、この記事は子貢が田常に面識のあつたことを表しており、『史記』子貢遊説記事のように子貢が田常に説いた可能性をも示している。

一方、「田常亂を齊に作さんと欲す」という事件は、「作さんと欲す」とあるように『史記』子貢遊説記事中では起きていない。だが『春秋』『左傳』の哀公十四年に田常は次のような事件を引き起こしている。

經：哀公十有四(前四八二)年……夏四月、齊の陳恆、其の君を執へ、舒州に眞く。……(六月)齊人、其の君壬を舒州に弒す。

傳：(六月)甲午、齊の陳恆其の君壬を舒州に弒す。孔丘、三日齊して、齊を伐たんと請ふこと三たびす。公曰く、魯、齊に弱めらるること久し。子の之れを伐つに、將に之れを若何せんとするか、と。對へて曰く、陳恆、其の君を弒す。民の與せざる者半ばなり。魯の眾を以て、齊の半ばに加ふれば、克つべきなり、と。公曰く、子季孫に告げよ、と。孔子辭す。退きて人に告げて曰く、吾、大夫の後に從へるを以て、故に敢へて言はずんばあらず、と。

この事件は田常(陳恆)が、齊の簡公(壬)を執らえ弒したというのである。重要なのは『左傳』後半部に記される

孔子の心情である。孔子は田常の事件を知り、不可能と解つていながら齊を伐つべきことを魯の哀公に進言している。田常が主君簡公を弑したと聞き、孔子は行動を起こさずにはいられなかった。孔子は「吾、大夫の後に従へるを以て、故に敢へて言はずんばあらず」と言い譯するかの様に嘆く。この孔子の嘆きは、『史記』子貢遊説記事の發端で田常が魯を攻めようとしているのを知り「國の危ふきこと此の如きに、二三子何爲れぞ出づること莫きか」と弟子達に決起を促した心情と通じるのではないだろうか。『左傳』は齊討伐を主張し、『史記』は齊の攻撃より魯を守ることを求めるという具合に孔子の要求は異なる。しかし田常の亂に對して齊を押さえ、魯を救いたいと願つて行動した孔子の心情は、間違ひなく共通している^⑩。

更に田常の亂に對して齊を押さえ魯を救うために、『史記』子貢遊説記事で子貢が選ばれた理由を考えてみよう。『史記』子貢遊説記事では齊を押さえ魯を救うために、武力ではなく子貢の辯舌が用いられている。子貢の辯舌に關して『左傳』は、子貢が言葉巧みに外交交渉を進めた様を幾條か記している。例えば哀公十二年に次のような記事がある。

哀公十二年（前四八三年）（夏）：公、吳に橐臯に會す。吳子、大宰嚭をして盟を尋めんことを請はしむ。公、欲せず。子貢をして對へしめて曰く、盟は信を周にする所以なり。故に心以て之れを制し、玉帛以て之れを奉じ、言以て之れを結び、明神以て之れを要す。寡君以爲へらく、苟くも盟有らば、改むべからざるのみ。若し猶ほ改むべくんば、日に盟ふも何の益かあらん。今、吾子必ず盟を尋めん^{あたた}と曰ふ。若し尋むべくんば、亦た塞からしむべきなり、と。乃ち盟を尋めず^{あたた}。

魯の哀公が吳と橐臯（安徽省）で會合し、吳子は大宰嚭に魯と以前の盟をあたため直させようとしたが、哀公はそれを望まなかつた^⑪。そこで子貢を遣わしその辯辭によつて吳を説得し、盟をあたため直さずにするだといふ記事である。更には哀公二七年に越王の使者によつて魯と邾の境界を定められた折、その盟を不服に思つた三桓氏が、子貢をその

場に呼んでいたら、その手腕によつて不満足な盟約を結ばずに済んだであらうと後悔した記事もある。次に擧げる「左傳」の記事である。

哀公二七（前四六八）年：春、越子、舌庸をして來聘し、且つ邾の田を言ひて、駘上に封ぜしむ。二月、平陽に盟す。三子皆従ふ。康子之れを病ひ、言、子贛に及んで曰く、若し此に在らば、吾、此に及ばざるか、と。武伯曰く、然り。何ぞ召さざる、と。曰く、固より將に之れを召さんとす、と。文子曰く、他日請ふ念へ、と。

この哀公二七年の記事には、もし子貢が外交手腕を振るっていたらと述べられている。もし子貢が外交手腕を振るっていたら、魯は危機から逃れられたと三桓氏が考へたことを、「左傳」は記しているのである。これら哀公十二・二七年の記事から、子貢が辯舌をふるえば魯を救えると考えても不自然ではあるまい。

以上「史記」子貢遊説記事第一・二段落について、「春秋」「左傳」と比較した結果を整理しておこう。初めに「左傳」哀公十五年の記事によつて子貢と田常のつながりが確認できた。更に田常の亂に際し、孔子は齊を押さえ魯を救いたいと強く願っていたことが、「春秋」「左傳」哀公十四年の記事に見えた。そして子貢は辯舌によつて魯を外交危機より救つており、子貢の辯舌が高く評價されていたと「左傳」哀公十二年や二七年の記事から窺えた。これらの記事を総合すると「史記」子貢遊説記事の第一・二段落で、齊を亂した田常を鎮めようと孔子が考へ、田常を鎮めるために辯舌に秀でた子貢が選ばれ、子貢が田常を説得するという粗筋ができあがる。「史記」子貢遊説記事第一・二段落の粗筋は「春秋」「左傳」を組み合わせることによつて作成可能なのである。

しかし裏返せば、「史記」子貢遊説記事第一・二段落は話の粗筋が「春秋」「左傳」に見出せるのみであり、子貢が「史記」子貢遊説記事のように、孔子の許可を得て齊に赴き、田常に吳を攻めるよう説得したということは、全く確認できないのである。他にも田常が「高・國・鮑・晏を憚る。故に其の兵を移し以て魯を伐たんと欲した」ことや、子路・子張・子石が魯を救うために名乗りをあげたことは、他の書物では確認できない。つまりは話の粗筋だけが

「左傳」等に見えるということになる。

冒頭から些か検討が長くなったが、『史記』子貢遊説記事に戻ろう。『史記』子貢遊説記事の一・二段で、子貢は齊の田常に魯を伐つのをやめるよう説得した。齊は魯ではなく吳と戦うべきと子貢が主張したのであった。その結果、子貢は吳が齊を攻撃するようにしむけることを請け負う。そして齊を離れ吳へと向かったのが次の第三段である。

3 「子貢、吳王に説く」

説きて曰く「臣之れを聞く、王者は世を絶たず、霸者は敵を彊ふる無く、千鈞の重きも、銖兩を加へて移る、と。今萬乗の齊を以て千乗の魯を私し、吳と彊きを争はんとす。竊かに王の爲に之れを危ぶむ。且つ夫れ魯を救ふは顯名なり。齊を伐つは大利なり。以て泗上の諸侯を撫し、暴齊を誅し以て彊晉を服さば、利の焉れより大なるは莫し。名は亡魯を存し、實は彊齊を困しむ。智者は疑はざるなり」と。吳王曰く「善し。然りと雖も吾嘗て越と戦ひ、之れを會稽に棲ましむ。越王身を苦しめ士を養ひ、我に報ゆる心有り。子、我の越を伐つを待て。而して子を聽かん」と。子貢曰く「越の勁きは魯を過ぎず、吳の彊きは齊を過ぎず。王、齊を置きて越を伐たば、則ち齊已に魯を平げん。且つ王、方に亡を存し絶を繼ぐを以て名と爲すに、夫れ小越を伐ちて彊齊を畏るるは、勇に非ざるなり。夫れ勇者は難を避けず、仁者は約を窮しめず、智者は時を失はず、王者は世を絶たず、以て其の義を立つ。今越を存し諸侯に示すに仁を以てし、魯を救ひ齊を伐ち、威晉國に加ふれば、諸侯必ず相ひ率ゐて吳に朝し、霸業成らん。且つ王必ず越を惡まば、臣請ふ、東のかた越王に見え、兵を出だして以て從はしめん。此れ實は越を空しくし、名は諸侯を從へて以て伐つなり」と。吳王大いに説び、乃ち子貢をして越に之かしむ。

第三段で子貢は吳王に「もし齊が魯を奪えば齊は吳の脅威となるが、吳が魯を救うために齊と戦うなら、吳は小國を救うという名譽を得るとともに齊を苦しめることができる」と齊征伐を勧める。吳王は贊意を示しつつも「越が吳に報復する機會を窺っているから、先に越を伐つてから齊を伐つことにしたい」と答える。そこで子貢は「先に弱小の

越を伐ち、後から強大な齊を伐つのは覇者の道ではない。越に派兵を要請して無力化し、越とともに齊を伐てばよい（そうすれば呉に攻めて来ることはない）」と説き、越に派兵を要請しに向かう。

ここでは呉と子貢の繋がりを見てみよう。第二段で、哀公十二年囊臯（安徽省）の會盟において、子貢が魯の一角として呉と交渉し、魯の希望を適えたことは既に記した。このほか左に引用するように、『左傳』哀公七年に鄆（山東省）でも囊臯と同じく呉の大夫宰嚭と會見しており、また哀公十一年には艾陵（山東省）で叔孫武叔とともに呉王（夫差）と話している。

哀公七（前四八八）年・夏、公、呉に鄆に會す。呉、來りて百牢を徵す。子服景伯對へて曰く、先王も未だ之れ有らざるなり、と。……呉人聽かず。……乃ち之れを與ふ。大宰嚭、季康子を召す。康子、子貢をして辭せしむ。哀公十一（前四八四）年（夏）：將に戰はんとす。吳子、叔孫を呼びて曰く、而の事は何ぞ、と。對へて曰く、司馬に従ふ、と。王、之れに甲・劔・鉞を賜ひて曰く、爾の君事を奉じ、敬みて命を廢すること無かれ、と。叔孫、未だ對ふること能はず。衛の賜進みて曰く、州仇、甲を奉じて君に従はん、と。而して拜す。

右のうち哀公七年鄆の盟は、第二段で言及した哀公十二年囊臯の盟で呉があたため直したとした盟である。呉は魯に對して、百牢（百膳）という分不相應な料理を要求し、魯は應ぜざるを得なかった。この時子貢は大夫季康子の使者として、季康子が會盟に缺席することを大宰嚭に伝える役目を果たしている。哀公十一年の記事で子貢は「衛の賜」と記されている。呉王の禮をわきまえない態度に窮した叔孫に代わり、子貢は呉王に返答をしている。この哀公十一年の記事は、子貢遊説記事の後半第七段に見える呉が齊を敗ったという艾陵の戰に、子貢が参加していたことを裏付けている。

こうした記事から子貢と呉に繋がりのあることが確認できよう。だが第三段にある子貢が呉に赴き、呉王に説いたとされていることは『左傳』などに見えない。ただし哀公七年と十二年に子貢と對面している大宰嚭は、『史記』子

貢遊説記事と深く関わっていると思われる。これに關しては後に詳述するとして、次の第四段に進もう。

4 「子貢、越王（勾踐）に説く」

越王道を除ひ郊迎し、身みづから御し舎に至り、問ひて曰く「此れ蠻夷の國なり。大夫何を以てか儼然と辱かたじけなくも之れに臨める」と。子貢曰く「今者、吾、吳王に説くに、魯を救ひ齊を伐つを以てす。其の志之れを欲すれども、而れども越を畏れ、『我の越を伐つを待たば乃ち可なり』と曰ふ。此の如くんば越を破ること必せり。且つ夫れ人に報ゆるの志無くして、人をして之れを疑はしむるは、拙きなり。人に報ゆるの意有りて、人をして之れを知らしむるは、殆きなり。事未だ發せずして先に聞こゆるは、危きなり。三者は事を擧ぐるの大患なり」と。句踐頓首再拜して曰く「孤嘗て力を料らず、乃ち吳と戦ひ、會稽に困しみ、痛み骨髓に入る。日夜臂を焦がし舌を乾かし、徒だ吳王と踵を接して死せんと欲するは、孤の願ひなり」と。遂に子貢に問ふ。子貢曰く「吳王人と爲り猛暴、羣臣堪へず。國家數々戦ふに敝れ、士卒忍びず、百姓上を怨み、大臣内に變ず。子胥諫を以て死し、太宰嚭事を用ひ、君の過に順ひて、以て其の私を安んず。是れ國を殘ふの治なり。今王誠に士卒を發し、之れを佐けて以て其の志を徹へ、重寶以て其の心を説ばしめ、辭を卑くして以て其の禮を尊くせば、其の齊を伐つこと必せり。彼戦ひて勝たざれば、王の福さいはひなり。戦ひて勝たば、必ず兵を以て晉に臨まん。臣請ふ、北のかた晉君に見え、共に之れを攻めしめん。吳を弱むること必せり。其の銳兵齊に盡き、重甲晉に困しみて、王其の敝を制すれば、此れ吳を滅ぼすこと必せり」と。越王大いに説び、許諾す。子貢に金百鎰、劍一、良矛二を送るも、子貢受けず。遂に行く。

第四段で子貢は越王に「越が吳に報復しようとしていることは、既に吳に知られており成功し難い。それでも吳を伐とうとするなら、吳に兵と寶物を獻じて吳王の暴政を煽り齊を伐たせ（吳の國力を弱め）るべきである。もし吳が齊に負ければ越王にとって幸運なことであるし、吳が齊に勝てば更に晉へと向かうだろうから、そうなたら越は晉と

もに吳を攻めればよい」と進言する。越王は子貢の説を聞き、喜んで承諾する。

越と子貢の繋がりを確認できる資料は全くない。ただこの第四段で子貢が越王に言う「夫無報人之志、而令人疑之、拙也。有報人之意、使人知之、殆也。事未發而先聞、危也」という諺のような言葉が、「戰國策」燕一に「(蘇代)曰、夫無謀人之心而令人疑之、殆。有謀人之心而令人知之、拙。謀未發而聞於外、則危」と見えていることだけを指摘しておく。

『史記』子貢遊説記事で越王を説得した子貢は、道すがらになるからか再び吳に立ち寄る。そして吳王に再會し、越に赴いた結果を報告するのが第五段である。

5 「子貢、吳王に越王には復讐心がないことを報告」

吳王に報じて曰く「臣敬みて大王の言を以て越王に告ぐ。越王大いに恐れ曰く『孤不幸にして、少くして先人を失ひ、内自ら量らず。罪を吳に抵し、軍敗れ身辱められ、會稽に棲み、國虚莽と爲る。大王の賜に頼り、俎豆を奉じて祭祀を修むるを得しむ。死すとも敢へて忘れず』と。何の謀か之れ敢へて慮らん」と。後五日、越、大夫種しよをして頓首し吳王に言はしめて曰く「東海の役臣、孤句踐の使者臣種しよ、敢へて下吏を修め左右に問ふ。今竊かに聞く、大王將に大義を興し、彊きを誅し弱きを救ひ、暴齊を困しめて周室を撫せんとす、と。請ふ、悉く境内の士卒三千人を起こさん。孤請ふ、自ら堅を被り、銳を執り、以て先んじて矢石を受けん。越の賤臣種しよに困り先人の藏器、甲二十領、鈇ふ、屈盧の矛、步光の劍を奉じて、以て軍吏を賀す」と。吳王大いに説び、以て子貢に告げて曰く「越王身みづから寡人に従ひ齊を伐つことを欲す。可か」と。子貢曰く「不可なり。夫れ人の國を空しくし、人の眾を悉くし、又た其の君を従ふるは、不義なり。君其の幣を受け、其の師を許して、其の君を辭せよ」と。吳王許諾し、乃ち越王に謝す。是に於いて吳王乃ち遂に九郡の兵を發し齊を伐つ。

子貢は吳王に、越王が復讐してくることはないことを報告する。五日後、越の大夫種しよが使いとして、吳王に甲、矛、

劍などを獻じ、越王自身も共に出陣する意志のあることを伝える。しかし子貢は吳王に「越王の出陣は斷わり、兵と贈物のみ受けるように」と述べる。吳王は了承し齊討伐の兵を擧げる。

この第五段で越が吳に兵とともに寶器を贈ったことは『左傳』に見える。哀公十一年（前四八四）年の「吳の將に齊を伐たんとするに、越子、其の眾を率ゐ以て朝す。王より列士に及ぶまで皆な饋賂有り」という條である。しかしこの『左傳』の條には子貢との關係は見えない。

子貢遊説記事ではさきの第四段で、吳が齊を攻めて敗つたならば、次に晉を攻めるだろうと子貢は越王に語つた。第六段ではこの豫想に基づき子貢は晉に出掛け、晉に吳が攻めて來た時の用意をさせる。

6 「子貢、晉君に説く」

子貢因りて去り晉に之く。晉君に謂ひて曰く「臣之れを聞く、慮りの先に定まらずんば以て卒に應ずべからず、兵の先に辨ぜずんば以て敵に勝つべからず、と。今夫れ齊と吳と將に戦はんとす。彼戦ひて勝たずんば、越の之れを亂すこと必せり。齊と戦ひて勝たば、必ず其の兵を以て晉に臨まん」と。晉君大いに恐れて曰く「之れを爲すこと奈何せん」と。子貢曰く「兵を修め卒を休ませ以て之れを待て」と。晉君許諾す。

子貢は晉に行き「吳が齊と戦い、もし吳が勝つたならば晉に進攻してくるだろうから準備すべきである」と説く。この段に説かれる晉と子貢の關係を示す資料もない。

7 「子貢、魯に歸る」

子貢去りて魯に之く。吳王果たして齊人と艾陵に戦ひ、大いに齊師を破り、七將軍の兵を獲るも歸らず。果たして兵を以て晉に臨み、晉人と黃池の上りに相ひ遇ふ。吳晉疆きを争ふ。晉人之れを撃ち、大いに吳師を敗る。越王之れを聞き、江を涉り吳を襲ひ、城を去ること七里にして軍す。吳王之れを聞き、晉を去りて歸り、越と五湖に戦ふ。三たび戦ふも勝たず、城門守らず。越遂に王宮を圍み、夫差を殺して其の相を戮す。吳を破りて三年、

東向して霸たり。

子貢が魯に歸ると、吳は齊を艾陵に敗った後、子貢の豫測通り晉へ進攻する。しかし黃池で吳は晉に敗れる。越王はそれを聞き吳に兵を進める。吳王は晉より戻り越と戦うが勝てず、遂に五湖で越に敗れ、吳王夫差は殺される。そして三年後、越王は霸を唱える。

この第七段には第二段から第六段で、子貢が各國に行なった遊説の結果が簡潔に記されている。子貢に説得された齊・吳・越・晉の四箇國は、子貢の思惑通り互いに攻め合い、最後に越が霸者となる。この段落に記された艾陵の戦、黃池の會、吳の滅亡と越の霸といった事件は以下の資料に見える。

まず初めに吳が齊を破った艾陵(山東省)の戦は、『春秋』『左傳』の次の條にある。

經：哀公十有一(前四八四)年……五月公、吳に會し齊を伐つ。甲戌、齊の國書、師を帥る吳と艾陵に戦ふ。齊師敗績す。齊の國書を獲。

傳：甲戌、艾陵に戦ふ。展如、高子を敗る。國子、胥門巢を敗る。王卒之れを助け、大いに齊師を敗り、國書・公孫夏・閻丘明・陳書・東郭書と、革車八百乘、甲首三千とを獲、以て公に獻ず。

『春秋』では魯が吳と共に齊を敗ったとし、『左傳』には齊の五將軍が捕獲されたことが記されている。『史記』子貢遊説記事の魯は艾陵の戦とは無關係であり、子貢遊説記事が「七將軍の兵を獲る」と言うのとも小異する。

子貢遊説記事において齊を敗った吳は、黃池(河南省)に赴き晉と會する。子貢遊説記事には「(吳)兵を以て晉に臨み、晉人と黃池の上りに相ひ遇ふ。吳晉強きを争ふ。晉人之れを撃ち、大いに吳師を敗る」と吳と晉は黃池で會った後、干戈を交えているが、『春秋』『左傳』では會盟をとり交わすのみである。ただし吳と晉のどちらが盟主となるか、外交上のかけひきが演じられている。更に子貢遊説記事で、吳と晉が戦っているその際に越が吳を攻めたことと、越が吳と三度戦ったことも『春秋』『左傳』は黃池の會と同年のこととして記録している。哀公十三年の條である。

經：哀公十有三（前四八二）年（夏）……公、晉侯と吳子とに黃池に會す。……於越、吳に入る。

傳：六月丙子（十一日）、越子、吳を伐つ。……乙酉（二十日）戰ふ。……丙戌（二日）復た戰ふ。大いに吳の師を敗る。……丁亥（二三日）吳に入る。吳人、敗を王に告ぐ。王、其の聞こえんことを惡み、自ら七人を幕下に對す。秋七月辛丑、盟す。吳晉、先を爭ふ。……乃ち晉人を先にす。

「春秋」では黃池の會の後に越が吳に攻め入る事件を記しているが、「左傳」は越の吳征伐は六月、會盟が七月と逆になっている。

また、黃池の會で吳と晉のどちらが盟主となったのかは資料によつて記述が異なる。「左傳」では「晉人を先に」と晉が先に血を歃つたとしている。ところが左に引くように「公羊傳」「國語」は吳が盟主として先に歃つたとしている。

公羊傳：哀公十三年（夏）……公、晉侯と吳子とに黃池に會す。吳、何を以て子と稱するか。吳、會に主たればなり。

國語（吳語）：以て晉公午に黃池に會す。……吳公、先に歃り、晉侯、之れに亞ぐ。

黃池の會の盟主が吳であつたのか晉であつたのかは、記録の上で二分しており判然としない。しかし「史記」子貢遊説記事が「晉人之れを撃ち、大いに吳師を敗る」と述べるのは、晉が吳よりも優位に立つたことを意味しているよう。

「史記」子貢遊説記事が晉を吳よりも優位に立つたとするのは、即ち「左傳」で晉が盟主となった記録と合致し、吳を盟主とする「公羊傳」「國語」の記録とは合わない。

そして子貢遊説記事では吳が晉と彊きを争っている隙に、越が吳を攻める。この吳越の攻防の結末は「越遂に王宮を圍み、夫差を殺して其の相を戮す。吳を破りて三年、東向して霸たり」と結ばれる。「史記」子貢遊説記事で吳の滅亡は黃池の會に際し、越が吳を攻めたた結果のように記述されている。しかし「左傳」に據れば黃池の會は哀公

十三(前四八二)年であり、呉が滅亡するのは哀公二二(前四七三)年である(『左傳』哀公二年：冬十一月丁卯、越滅呉。そして『左傳』では哀公十三年の黃池の會の折の呉越の戰で呉は一旦「越と平らい」でいる(『左傳』哀公十三年：冬、呉及越平)。

最後に子貢遊說記事で越が呉の滅亡に際し「其の相を戮した」ことと「霸」を唱えたことは、『左傳』には見えない。ところが『史記』の越王句踐世家には次のようにある。

越王、乃ち呉王を葬りて、太宰嚭を誅す。……越の兵、江淮の東に横行し、諸侯、畢く賀す。號して霸王と稱す。この記事で越王は呉王を葬った後、呉の大夫であつた太宰嚭を戮し、諸侯が越王を霸王と稱したといふのである。¹⁶⁾

以上で『史記』子貢遊說記事の子貢の辯舌によつて魯が守られる顛末は語り終わっているのだが、最後に結びの語がある。¹⁶⁾

8 「結び」

故に子貢一たび出でて、魯を存し、齊を亂し、呉を破り、晉を彊くして越を霸とす。子貢一たび使ひして、勢をして相ひ破らしむ。十年の中、五國各々變有り。

本章で『史記』子貢遊說記事を「春秋」や『左傳』等と對比した結果、『史記』子貢遊說記事中の事件で『春秋』や『左傳』等で確認できたものと全く他の資料に見えないものが明らかになつた。確認できたのは、田常が齊に亂を作したこと、孔子が齊を伐とうとしたこと、子貢と田常の繋がり、子貢の辯舌に秀でたこと、呉と子貢の繋がり、越が呉に兵と寶器を贈ったこと、艾陵の戰、黃池の會、呉の滅亡、越の霸である。こうしてみると『春秋』や『左傳』に見える事件が『史記』子貢遊說記事には多く織り込まれている。むしろ齊呉が戦い、呉晉が強きを争い、越が呉を滅ぼすという『史記』子貢遊說記事に見える事件の流れは『左傳』等ではほぼ確認できた。しかし子貢自身については、辯舌に秀でていたことと齊・呉との關係が確認されたが、越・晉とは繋がりが見出せず、『史記』子貢遊說記事のよ

うに、魯を守るために齊・吳・越・晉の四箇國に赴き説を述べたことは全く確認できなかった。では子貢が魯を守るために齊・吳・越・晉の四箇國に遊説し、互いに戦わせたという『史記』子貢遊説記事は、如何にして形成されたのだろうか。

三 『史記』子貢遊説記事の成立

『史記』子貢遊説記事が如何にして形成されたのかを考えるために、子貢遊説記事の前身とも思われる記述を幾つか擧げてみたい。まず『韓非子』五蠹篇に次のような記述がある。

齊の將に魯を攻めんとするに、魯、子貢をして之れに説かしむ。齊人曰く、子の言、辯ならざるに非ざるなり。

吾が欲する所の者は土地なり。斯の言の謂ふ所に非ざるなり、と。遂に兵を擧げ魯を伐ち、門を去ること十里にして以て界と爲す。……子貢辯智にして魯削らる。

これによると齊が魯を攻撃しようとした時に、魯の使者として子貢は辯舌によって齊の攻撃を回避しようとしたが、齊人は「吾が欲する所の者は土地なり。斯の言の謂ふ所に非ざるなり」と子貢の辯を受け入れず、魯を攻めたてている。この記述は『史記評林』李光緒補引く何孟春や『史記會注考證』も子貢遊説記事の部分に引用しており、後者は「其の言、此の傳と相ひ反す。而らば亦た未だ必ずしも實事ならず」と評する。『會注考證』の評の通りこの記述がそのまま事實である可能性は低い。しかし、前章の第一・二段落で見た『左傳』哀公十五年に子貢が田常と齊で會い成を取り戻した記事や、小論が問題とする子貢遊説記事などと併せ考えれば、この『韓非子』の記述は子貢が齊へ魯を救うために出掛けたという傳承があったことを窺わせる。

そして子貢が齊へと遊説に赴くという主題が、『史記』子貢遊説記事のように田常や吳越の攻防と結び付いたのが、『墨子』非儒下篇にある次の文章である。

孔丘^①齊に之き景公に見ゆ。景公説び、之れを封するに尼谿を以てせんと欲し、以て晏子に告ぐ。晏子曰く、不可なり、と。……是に於いて其の禮を厚くし、其の封を留め、敬見すれども其の道を問はず。孔丘乃ち景公と晏子とに恚怒し、乃ち鴟夷子皮を田常の門に樹て、南郭惠子に告ぐるに爲さんと欲する所を以てし、魯に歸る。頃有りて、齊の將に魯を伐たんとするを聞ひ、子貢に告げて曰く、賜か、大事を擧ぐるは今の時に於いてす、と。乃ち子貢を遣はし齊に之かしめ、南郭惠子に因り以て田常に見え、之れに勸めて吳を伐たしめ、以て高・國・鮑・晏に教へ、田常の亂を害ふを得るなからしめ、越に勸めて吳を伐たしむ。三年の内、齊吳破國の難ありて、伏尸言術を以て數ふるは、孔丘の誅なり。

この文の前半で孔子は齊での仕官を晏子に妨害され景公と晏子に對して憤る。その後、魯において孔子は「齊の將に魯を伐たんとするを聞ひ」「子貢を遣はして齊に之かしめ」「田常に見え、之れに勸めて吳を伐たしめ」「越に勸めて吳を伐たしむる」のである。孔子が子貢を齊に派遣して、齊の田常の矛先を吳へ向けさせ、越に吳を伐たせるといふ筋書きは、『史記』子貢遊說記事の前半部と完全に一致している。筋書きが一致する點でこの『墨子』非儒下篇の文章は『史記』子貢遊說記事と同根であると判断できる。

『墨子』非儒下篇は『史記』子貢遊說記事の前半と筋書きは一致するが、『史記』子貢遊說記事とは異なる點もある。まず『墨子』では孔子と齊の關係が主題の中心にある。孔子が仕官の適わなかつた齊への怨みをはらすために子貢を用い、齊に吳と事を構えさせ、越に吳を滅ぼさせ、魯を救わせる。齊・吳の混亂は全て孔子の謀なのである。また『墨子』には晉についての記述や、艾陵の戰、黃池の會、越が霸を唱えるなどは記されていない。齊と吳、吳と越で戰亂となつた理由も、孔子の謀略と言う以外には何も述べられていない。『史記』子貢遊說記事に比べると、子貢が辯舌をふるつて各國を戰亂に導く過程が缺如し、事實關係のみが簡潔に述べられている。このように『墨子』非儒下篇の文が『史記』子貢遊說記事に記す事柄の多くを缺き、簡潔になっている理由は、『墨子』非儒下篇の文が『史記』

「史記」子貢遊説記事に先行するからである。子貢遊説記事に記される艾陵の戦、黃池の會、越が霸を唱えるなどの事件は、「墨子」非儒下篇の後に付け加えられたと思われる。

「墨子」非儒下篇が「史記」子貢遊説記事の前半部を記述しているとすれば、「墨子」非儒下篇が記述を缺いている子貢遊説記事後半部は、如何にして形成されたのだろうか。子貢遊説記事後半部に記される越や晉は、子貢との接点が見出せなかつた。それにも関わらず、越と晉は子貢の遊説先となっている。特に越は「史記」子貢遊説記事で子貢が遊説を行った結果、最後に霸を唱えるまでに至っている。ならば子貢との繋がりが見出せない越や晉と關わる人物は、他にいるのではあるまいか。

結論から言えば、その人物は前述した呉の大宰嚭であると思われる。この大宰嚭という人物は吳王夫差に越王勾踐を會稽に許すよう勸めて、會稽の恥のような結果を招く。つまり大宰嚭は呉の滅亡に深く關わり、亡國の王夫差に重用されている^⑩。彼は「史記」伍子胥列傳に「吳王將に北のかた齊を伐たんとす。越王句踐、子貢の謀を用い、乃ち其の衆を率ゐ以て吳を助けて、重寶以て獻じ太宰嚭に遺る。太宰嚭既に數々越の略を受け、其の越を愛信すること殊に甚し。日夜、爲に吳王に言ひ、吳王、嚭の計を信用す」と記され、越王が用いた子貢の謀でも越王と吳王の間に立つ役割を演じたことになっている。そして吳王に取り入りつつ、越から貨賂をしばしば受け取り關係を保っていたらしいことも、この記事からは窺える。また「左傳」哀公十三年の吳と晉が盟主を争つた黃池の會にも參加していたらしい^⑪。

確かに大宰嚭は「史記」子貢遊説記事中で活躍することはない。しかし既に前章の第三段で見た通り、「左傳」において子貢が吳と接觸した三度のうち二度は大宰嚭が吳を代表していた。その上「論語」子罕篇で子貢と對話している大宰は、今問題にしている呉の大宰嚭といわれている^⑫。このように子貢と大宰嚭の關係は極めて深い。更にこの大宰嚭に關して興味深い記述が、次にあげる「呂氏春秋」知化篇に見えている。

吳王夫差將に齊を伐たんとす。子胥曰く「不可なり。夫れ齊の吳に與けるや、習俗同じからず、言語通ぜず。我其の地を得るも處る能はず、其の民を得るも使ふを得ず。夫れ吳の越に與けるや、土を接し境を鄰し、壤交はり通屬なり、習俗同じく、言語通ず。我其の地を得れば能く之れに處り、其の民を得れば能く之れを使ふ。越の我に於けるも亦た然り。夫れ吳越の勢兩立せず。越の吳に於けるや、譬へば心腹の疾の若し。作る無しと雖も、其の傷深くして内に在るなり。夫れ齊の吳に於けるや、疥癬の病なり。苦しみ其れ已だしからず、且つ其れ傷る無し。今越を釋てて齊を伐つは、之れを譬へば猶ほ虎を懼れて狢を刺すがごとし。之れに勝つと雖も、其の後患央くる無し」と。太宰嚭曰く「不可なり。君王の令の上國に行はれざる所以は、齊・晉なり。君王若し齊を伐ちて之れに勝ち、其の兵を徙し以て晉に臨まば、晉必ず命を聽かん。是れ君王一舉にして兩國を服するなり。君王の令必ず上國に行はれん」と。夫差以て然りと爲し、子胥の言を聽かずして、太宰嚭の謀を用ふ。

ここで興味深いのは、越討伐を勧め齊と争わないよう説いた伍子胥に反對し、吳王に齊討伐を勧め、齊を敗つたなら「其の兵を徙し以て晉に臨む」よう太宰嚭が吳王夫差に進言していることである。「史記」子貢遊說記事では子貢が越王に、吳が齊に勝てば晉に向かうだろうと豫測を語り（第四段、吳はその通りに動いた。ところが子貢には吳へ赴いた記録も、越や晉との繋がりを示す記録も見出せなかった。「史記」子貢遊說記事で、子貢が吳に齊を伐つよう勧め、齊を敗つたなら晉に向かうだろうと語つたのは、本來太宰嚭の行動であつた可能性が指摘できるのである。この指摘については「呂氏春秋」知化篇の記述の他に、既述した子貢と吳との繋がりには太宰嚭が深く関わっていることも傍證とならう。また「史記」子貢遊說記事後半で重要な主題となる吳越の攻防に關して、太宰嚭が實際に鍵を握つていた人物だつたことも見逃せまい。

最後に『史記』子貢遊説記事の形成過程を整理しておこう。まず『史記』子貢遊説記事に見える事件の多くは、『春秋』『左傳』等に記述されており、『春秋』『左傳』等の記事を組み合わせることにより、子貢遊説記事の粗筋さえ窺えた。しかし『春秋』『左傳』に見えた殆どの事件では、子貢の活躍が見られなかった。子貢は齊・吳としばしば關係はしたが、齊・吳を戦わせ、吳晉に強きを争わせ、越に吳を滅ぼさせたという『史記』子貢遊説記事に見える行動とは無關係であった。ただし『韓非子』に見えるような子貢が齊に遊説したという傳承は存在したらしい。そして子貢を齊に派遣し、齊・吳を混亂に陥れる『墨子』非儒下篇の記述は、子貢遊説記事前半部を簡潔に述べていた。更に後半部は子貢ではなく、吳の大宰嚭の傳承が関わって形成された可能性を指摘しえた。つまり『春秋』『左傳』等に見えた個々の事件が『墨子』非儒下篇のごとくまとめられ、後に大宰嚭の關わる吳越の攻防や晉に關する記述が付け足されたと考えられた。こうした形成過程のうちに、第四段で挙げた『戰國策』の言葉のような遊説家としての表現が付け加えられたのであろう。このような成立過程を経た『史記』子貢遊説記事であるから、單に事件や傳承を羅列した記事というよりは、遊説家子貢の物語として作成された一篇の説話と呼ぶのがふさわしい。だからこの『史記』子貢遊説説話の中に子貢の傳記に資すべきものは殆どない。子貢の傳記研究に資すべきものがあるとすれば、子貢と田常、大宰嚭との關係が深いものと分かったことであらう。今後子貢の傳記研究を更に進めるには、子貢と田常、子貢と大宰嚭との關係を更に究明する必要があると思われる。

『史記』子貢遊説記事は一篇の説話としてこそ、これからは論じられるべきであらう。仲尼弟子列傳の中で前後から獨立しており、段落構成もはっきりしている。事件の發端を第一段とし、結果を第七段で語り、結びの語が第八段におかれている。子貢の説がそれぞれの國に次々に受け入れられ、思惑通りの結果へと進んで行く展開も、その結果

があつたという結末も、全て子貢が魯を守るための策略であつたという一點に結び付けるこの説話は、物語としてもよくできている。説話としての『史記』子貢遊説記事は、子貢遊説記事第四段で同様の諺を用いていた『戰國策』との関係や、後に『史記』子貢遊説記事が取り込まれていく『越絶書』内傳陳成恆や『吳越春秋』夫差内傳との関係を明らかにする必要があるが、そうした問題についてはまた別の機会に検討することにしたい。

註

① 端木賜の字は多く子貢とするが、子贖とすべき旨が錢大昕「十駕齋養新錄」卷二「子贖」に見え、「説文、贖賜也、貢獻也。兩字音同義別。子貢名賜、字當从贖」と説かれている。しかし小論では引用文の多くが「子貢」に作っており、混乱を避けるために通行の「子貢」を用いることとする。

② 主な子貢研究論文としては以下の諸篇がある。佐藤一郎「論語における子貢の研究—古代哲學の成立と商業的思惟—」（北海道大學文學部紀要）一四 第一分冊、一九六五年、渡邊卓「弟子（八）—孔子説話の思想史的研究 その九—」（山梨大學教育學部研究報告）一八、一九六八年。のち一九七三年、創文社「古代中國思想の研究」所收、木村英一「子貢について」（福井博士頌壽記念、東洋文化論集）一九六九年。のち一九八一年、創文社「中國哲學の探求」所收、高橋均「仲尼弟子列傳について」（東京教育大學文學部紀要・國文學漢文學論叢）第一五輯、一九七〇年）、同「孔子集團について」（鹿兒島大學教育學部研究紀要・人文社會科學篇）第二四卷、一九七三年）、俣野太郎「論語にみえる諸弟子の記述 第二（上）（中）（下）—顏淵と子貢—」（大東文化大學東洋研究所「東洋研究」七・七三・七七號、一九八四—八六年）。これらの中で高橋均氏の二論文以外は「論語」「左傳」によって子貢を論じている。

③ 前掲木村英一「子貢について」は「子貢の國際外交場裏における活躍については、史記の弟子傳子貢の條にも若干の記述があるが、その記事には後人の構成らしいところがあって、そのまま信用することはできない。これに比べて、やはり左傳の記述の方が史料的な價值が高いであろう」として「左傳」の記事により子貢の傳記研究を展開される。

④ 「史記評林」に見える何孟春、楊慎、茅坤、李光縉の評語、崔適「史記探源」、施之勉「史記會注考證訂補」（一九七六年、臺灣、華岡出版）などは皆「史記」子貢遊説記事を史實ではなく後人の偽託、摺入とする。「史記」の註釋以外でも王安石「子貢」（臨川集）卷六四）、劉恕「通鑑外紀」卷九、蘇轍「古史」卷三三）、崔述「洙泗考信餘錄」卷一などは註釋家とはは同様の批判を展開している。

⑤ 梁玉繩『史記志疑』卷二八の子貢遊說記事に關する考證は以下の通り。「陳氏憚高・國・鮑・晏、何以欲移兵伐魯。子貢使齊在哀十五年魯與齊平之後、爲成叛故、何得強相牽引。伍子胥死于戰艾陵後、是時尚未賜鑊。何云子貢以諫死。左傳吳獲國書等五人、何云獲七將軍。黃池之會距戰艾陵二年、何言吳王不歸以兵臨晉。會盟爭長、吳先于晉。何云晉敗吳師。會黃池歸與越平、在哀十三年、越滅吳在哀二十二年、何云會黃池歸與越戰不勝見殺。越滅吳稱霸、在孔子卒後七年、何云子貢之出孔子使之。五國之事會、與子貢無干、何云子貢存魯亂齊破吳彊晉稱越。自哀八年齊伐魯至二十二年吳滅越、首尾十五歲、何云十年。傾人之邦、以存宗國、何以爲孔子。縱橫捭闔、不顧義理、何以爲子貢。即其所言、了無一實、而津津道之。子胥傳亦有句踐用子貢之謀、率衆助吳等語、豈不誕哉。墨子非儒下篇謂、孔子怒晏子沮尼谿之封于景公、適齊欲伐魯、乃遣子貢之齊勸田常伐吳、教高鮑母得害田常之亂、遂勸越伐吳、三年之內、齊吳破國。其爲六國時之妄談可見、孔鮒詰墨辨之矣。或曰、弟子傳皆短簡不繁、獨子貢傳榛蕪不休、疑是後人闖入、非史本文也」

⑥ 氏の引用する「韓非子」「說苑」の文は次の部分である。「齊將攻魯、魯使子貢說之、齊人曰、子言非不辯也、吾所欲者土地也、非斯言所謂也、遂舉兵伐魯……子貢辯智而魯削、以是言之、夫仁義辯智非所以持國也」(「韓非子」五蠹篇)、「齊攻魯、子貢見哀公請求救於吳、公曰、奚先若寶之用、子貢曰、使吳貴吾寶、而我師是不可恃也」(「說苑」奉使篇)。なお、「韓非子」五蠹篇の文は後に本文第三章でも引用する。

⑦ 底本は「史記會注考證」とし、分段は中華書局標點本による。段落番號下の見出しは筆者が假に附した。

⑧ 第一段の前の文は「子貢問曰、富而無驕、貧而無詘、何如。孔子曰、可也。不如貧而樂道、富而好禮」である。この文は言うまでもなく「論語」學而篇の「子貢曰、貧而無詘、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂道、富而好禮者也」に基づく文であり、子貢が遊說に出掛ける記事とは明らかに區別されよう。

⑨ 底本は「其地狹以泄」と作るが、「越絕書」内傳陳成恆が「池狹而淺」とし、「吳越春秋」夫差内傳が「其地狹以淺」とするのにより、「其池狹以淺」と改める。この校訂については既に王念孫が「讀書雜誌」卷三之四で論じている。

⑩ 底本は「地廣以深」と作るが、「越絕書」内傳陳成恆・「吳越春秋」夫差内傳ともに「池廣以深」としており、「池廣以深」と改める。また註⑨で挙げた王念孫「讀書雜誌」卷三之四を参照されたい。

⑪ この時のことは「論語」憲問篇にも以下のように記されている。「陳成子殺簡公。孔子沐浴而朝、告於哀公曰、陳恆殺其君、請伐之。公曰、告夫三子。孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也。君曰、告夫三子者、之三子告、不可。孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也」

⑫ 杜預集解によると以前の盟とは哀公七年の郟での盟を指す。哀公が郟の盟をあたため直すことを望まなかった理由を、楊伯峻「春秋左傳注(修訂本)」(一九八一年、中華書局)は「郟盟、吳徹百卒、且召季康子、故哀公及季氏皆不欲」としている。なお「左傳」哀公七年に郟で結ばれた盟の記事は、本文次の段で抄録する。

⑬ 前掲の楊伯峻「春秋左傳注(修訂本)」は叔孫州仇が吳王に返事ができなかった理由を「君賜臣劍、是欲其死、疑古無受劍殺之禮、故叔孫不

知所對」としている。

- ⑭ 「鉄」を司馬貞の素隱は「斧也」とするが、『史記會註考證』は「鉄字上、當有鉄名以與屈盧步光相對、不則鉄字衍文」と言う。
- ⑮ また『史記』吳太伯世家にも「越王滅吳、誅太宰嚭、以爲不忠、而歸」とある。
- ⑯ この結びの文の後ろは「子貢好廢舉、與時轉貨貨。喜揚人之美、不能匿人之過。常相魯衛、家累千金、卒終于齊」と結びの文とは繋がらない記述となるため、子貢遊説記事の範圍を本文の通りに定めた。
- ⑰ 底本とした孫詒讓『墨子閒詁』は「孔丘」を「孔某」と作るが、これは畢沅校注が「某字舊作孔子諱、今改」として、改めた「某」字に従っているためである。そこで本来の「孔子諱」即ち「孔丘」に戻した。以下同じ。
- ⑱ ここまでの部分は『晏子春秋』外篇にもほぼ同様の文が見える。
- ⑲ 會稽に越王勾踐を許すよう勧めたことは、『左傳』哀公元（前四九四）年に「吳王夫差敗越于夫椒、報構李也。遂入越。越子以甲楯五千保于會稽、使大夫種因吳太宰嚭以行成。吳子將許之」とある。また、『左傳』定公四（前五〇六）年に「伯州犂之孫嚭爲吳太宰以謀楚」と太宰嚭が當時の吳王闔閭の大宰になったとあり、以後大宰として吳の内政及び外交に深く擔わり夫差に重用されたらしい。詳しくは『左傳』、『史記』吳太伯世家・越王句踐世家・伍子胥列傳などに見える。
- ⑳ 吳滅亡の二年後の哀公二四（前四七二）年の『左傳』に「閏月、公如越、得大子適郢、將妻公而多與之地。公孫有山使告于季孫。季孫懼、使因大宰嚭而納賂焉、乃止」とあり、大宰嚭は魯の季孫氏からの賂を越の大子に渡す役を務めている。この文から大宰嚭は吳の滅亡後、越に逃れたかの印象を受ける。しかし既に小論二章で述べたように、『史記』越王句踐世家や吳太伯世家では吳の滅亡に際し大宰嚭は誅殺されたことになっており、大宰嚭が吳の滅亡後越に逃れたのか否か、眞偽は不明である。
- ㉑ 本文第二章第七段で引用した『左傳』哀公十三年の黃池の會の記事の後、吳王一行が宋を攻めようとした條に大宰嚭の名が次のように見えている。「王欲伐宋、殺其丈夫而囚其婦人。大宰嚭曰、可勝也、而弗能居也。乃歸」
- ㉒ 『論語』での子貢と大宰嚭の對話は子罕篇に見える。「太宰問於子貢曰、夫子聖者與。何其多能也。子貢曰、固天縱之將聖、又多能也。子聞之曰、太宰知我者乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉、不多也」この太宰を陸德明釋文では「鄭云、是吳太宰嚭」と言う。
- ㉓ 原文は「不苦其已也、且其無傷也」であり、陳奇猷『呂氏春秋校釋』（一九八四年、學林出版社）に「禮記檀弓下『母乃已疏乎』、鄭注『已猶甚也』。此『已』字亦當訓甚。『不苦其已也』猶言不苦其甚也。……『且其無傷也』、謂疥癬之病無傷於生命」とあるのに従い訓じた。
- ㉔ 「猶」は高誘注に「獸三歳曰猶也」とある。